土地の購入と、実験の報告

作成者:村上 慧

2022 年 8 月 13 日

(図 8)

(図 9)

はじめに

とうとう土地を購入した(図 8)。
前回の報告書の 9 ページ「3:千葉案」の中で 5 箇所目に見学した場所、千葉県山武市の土地である。
広さ 147.47 ㎡、価格は税込 30 万円。この報告書の作成に使っている MacBook Pro とほぼ同じ値段である。ちなみに MacBook Pro のサイズは 0.35m×0.245m なので、敷きつめると 1659 台になる。
仲介してくれた不動産会社「ケンハウジング」担当の安藤さんが、この物件の隣の家のご主人に、むかし家を建てた頃の土地の値段を聞いたところ、1000 万円以上したという。なんという暴落。世の中はインフレでみんなヒーヒー言っているが、ここはデフレもいいとこである。土地の値段は不思議だ。

むかしから、土地を所有するということの意味がわからなかった。地主になってもわからない。**だいたい土地を買ったとして、地下はどうなるのか**。深さ何メートルまでを所有していることになるのか。
調べてみたら、民法第 207 条に「土地の所有権は、法令の制限内において、その土地の上下に及ぶ」という記述がある。驚いた。**「上下に及ぶ」**。なんと大雑把な書き方だろう。「じょうげ」て。要するに厳密な決まりはないが、常識的な範囲でよろしくね、ということだろう。でなければ地球の反対側の地点（対蹠点というらしい）も、僕が所有していることになってしまう。これも調べてみたら、サンパウロから 1500km ほど離れた南大西洋上だった(図 9)。

土地の所有はよくわからないけど、「所有権は上下に及んでいる」という響きは、なんか勇ましくていい。
数年前から、地上になにかを作るにあたって、結局は不動産を持つというのが最強の手段なんじゃないかとは思っていた。これまでたびたび人の土地を借りてプロジェクトを行なってきたが、どうしても期間が限られてしまう。もっとアイデアを先に進められると思っても、時間がきたら強制終了させなければいけない。何か問題があったときに責任を負うのも土地の所有者である。

土地を買ってしまえば、途中で多少飽きてしまったとしてもプロジェクトを完遂するまでは**やらざるをえなくなる。**そのような枷を自分にかけるという意味でも、今回は思い切って(ほんとうに思い切って)買ってしまった。

「しみず不動産」のしみずさん(前回の報告書 9 ページ参照)が値下げしてくれた、65 万円のほうの土地も立地としては素晴らしかったので、迷った。完成したあとのことを想像すると、住宅街の真ん中にあるこちらの土地の方が、写真としては面白いものになる。しかし 65 万円というハードルは高い。それに「**なんとなく暗い感じがする**」のも気がかりだったので、やはり大人しく 30 万円のほうにしておくことにした。

あれだけフレンドリーに接してもらって、「土地は、なにか目的がなければタダでももらってはいけません」というアドバイスまでくれたしみずさんに断りの電話をいれるのは憂鬱だなあと思いつつ、6 月 30 日に電話をかけた。

検討したんですが、やはりキャンセルしようかと思いまして…という村上に対してしみずさんはきわめて軽い口調で、

「いいっすよいいっすよ！やっぱ値段ですか？」

と言った。

「そうですね。値段ですねえ」

「ははは。なかなかないっすよ！あんな物件」

「ですよね。でもちょっと、山武市のほうに 30 万円の物件があり…」

「ああ、山武のほうにね。でも、こっちも安くしたからって買うわけじゃないんでしょ？そっち買うんでしょ？」

「そうっすね～今はそっちかなあと思ってますね」

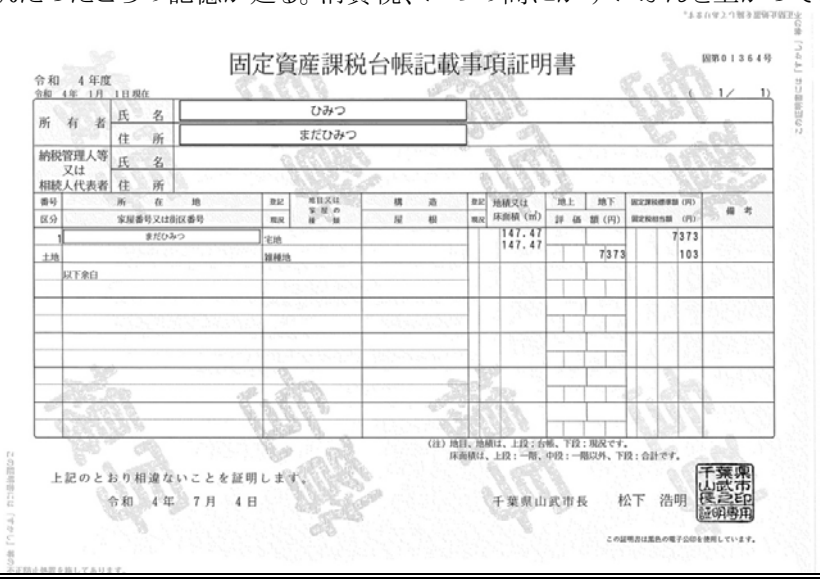
「いいっすいいっす！どっちにしても、こっちもたいしたアレにならないんで。どうも～」

と、さくっと終了した。アレというのは、つまり利益のことだろう。

地主までの道のり

7 月 5 日、(庭木の剪定中に脚立から落ちて怪我をしてしまい、固定資産税などを調べる作業が遅れてしまっていた)「ケンハウジング」の安藤さんからメールが来た。添付されていた書類(図 10)を見ると、土地の「課税標準額」(固定資産税を算出するにあたり、いわば行政が勝手に定めている土地の価格)は 7373 円だった。なみなみ。良いのか悪いのか。

問題の固定資産税は標準額の 1.4%なので、**103 円である**。安い。というか、**103 円**という字面を久しぶりに見る。消費税が 3%だったころの記憶が甦る。消費税、いつの間にかずいぶんと上がってしまったな。



固定資産課税台帳記載事項証明書

令和　4年度
令和　4年　1月　1日現在

固第01364号

(1/ 1)

所有者	氏名	ひみつ
	住所	まだひみつ
納税管理人等又は相続人代表者	氏名	
	住所	

番号 区分	所在地 家屋番号又は街区番号	登記 現況	地目又は家屋の種類	構造 屋根	登記 現況	地積又は床面積(㎡)	地上 評価額(円)	地下	固定資産税標準額(円) 固定資産税税額(円)	備考
1	まだひみつ					147.47			7373	
土地		宅地				147.47		7373	103	
	以下余白	雑種地								

(注) 地目、地積は、上段:台帳、下段:現況です。
床面積は、上段:一階、中段:一階以外、下段:合計です。

上記のとおり相違ないことを証明します。

令和　4年　7月　4日

千葉県山武市長　松下　浩明

千葉県山武市長之印 証明専用

この証明書は黒色の電子公印を使用しています。

(図 10)

このメールで村上は完全に購入を決め、7 月 19 日、千葉市にある「ケンハウジング」に出向いた。

<7 月 19 日>

お腹の不調を感じながら、約束の 11 時 5 分前に事務所に着き、安藤さんとスタッフの人に出迎えてもらい、2 階の応接室に案内される。手指の消毒を促され、荷物をおろしてすぐに「お手洗いをお借りしてもいいですか？」と切り出し、トイレに 5 分ほどこもった。小ぶりながら清潔なウォシュレット付きトイレだった。

無事用をたして応接間に出ると、すぐに安藤さんが物件説明を始める。**安藤さんはめっちゃいい人である。**予算 50 万円という、土地の購入にしては少なすぎる金額を伝えたときも、くすりとも笑わずに受け止めてくれた。今回の購入にあたっても、過去にこの土地に建物が建てられた形跡がないかを調べるため、50 年ほど前まで遡って国土地理院の航空写真を取り寄せてくれていた。**何かが解体された跡地だと、地中に瓦礫が残っている可能性がある**からである。三枚の航空写真の写真のどれを見ても、たしかに何かが建っている形跡はなかった。

ちなみに村上は安藤さんから「どのような用途ですか？」と聞かれたさい、「美術作家なので、そこで手作りの小屋みたいな作品をつくったり、畑をやったりする予定です」と答えた。安藤さんは微笑みながら、そうですか、大きなものをお作りになるんですね、と言ってくれた。

やがて安藤さんが呼んでくれた司法書士も到着した。登記の手続きには立ち合いが必要らしい。オフィスカジュアルというのか、清潔感のある服装の優秀そうな女性だった。村上は名刺をもらい、応接間には三人が揃った。なぜか**「役者が揃った」**感じがあり、気分が高揚した。ゾウが一列に並んでいるエジプトの壁画みたいな T シャツをきた村上と、ワイシャツに革靴の安藤さんと、仕事のできそうな司法書士が顔を突き合わせて机の上の図面を睨んで話し合っている。**このまま世界を救う計画を立て始めてもおかしくない取り合わせ**だと思った。

安藤さんからいくつかの説明を受ける。この土地は区分上「第一種住居地域」で「雑種地」であること。要するに大きな商業施設（ボーリング場とか）や農場でない限り、基本的になんでも建ててオッケーな場所である。また固定資産税は、土地の評価額が 30 万円以上のときに課税されるので、ここではかからない。つまり **103 円**払わなくていい。

「宅地高低差」も調べてくれていた。市道から、この物件までは 1m ほど下がっている。そして物件は私道よりも 50cm ほど高く造成されているので、市道から私道までの高低差は 1.5m である。2m 以上の高低差がある場合は、なんらかの手続きが必要らしいが、ここではその必要がない。物件前の私道は3者が共同所有しているが、持ち主がどこに住んでいるかはわからないとのことだった。

それから契約書に合計 4 箇所の印鑑を押し、今度は司法書士から権利書の説明や不動産登記簿の説明を受ける。司法書士は、土地の購入に関する手続きをいわば代行する役割を担う。

村上は「土地の持ち主の住所が変わった場合はどうすればいいのか」という質問をしてみた。その場合は変更手続きが必要なのだが、みんな忘れがちであるとのことだった。しかし 2 年後から、それが義務になるらしい。もし変更があった場合は、法務局に行って、自分で手続きもできるし、司法書士に頼んでもいいです、その場合は 2 万円かからないくらいだと思いますと、きりっとした目の司法書士が、ぼくの目をまっすぐ見ながら不織布マスク越しに言った。そして手数料を支払う。49120 円。

今回の購入にあたり、安藤さんは土地の値段の安さも考慮してくれて、仲介手数料を取らなかった。なので村上が支払った合計金額は、土地の値段 30 万に登記等の手数料を加えた 349,120 円だけである。これはつまり、「ケンハウジング」には一円も入っていないということではないのか。大丈夫か？それとも 30 万円のなかに利益が入っているのか。

あとで安藤さんから聞いた話だが、この物件は値段も安い上に、年に何度か社員を駆り出して草刈りもしなくちゃいけない。草刈りせずに放置していたら、山武市から**「草刈りしてください」という書面**がくる。そのコストを考えると、手放してしまった方がいいという話になったのだという。それにしても安藤さん、庭で剪定作業をしているときに落下して足を骨折してしまったという話も含め、ポイントが高すぎる。

契約が終わり、安藤さんから「このあと、物件のほうに行かれますか？」という質問があった。行きますと答えると、私も山武のように用事があるので、よければ現地で待ち合わせて、なにかわからないことがあれば聞いてくださいと提案してくれた。村上はこれから車で向かい、しばらく現場にいると思いますと答えた。では、私は 1 時過ぎには着くと思いますので、また後ほど、という話に落ち着き、解散。
司法書士の人にもお辞儀をして別れた。後日、登記が終わったら書類を送ってくれるという。今後、よっぽどなにか問題が起こらない限り、この人と会うことはないだろう。人生で初めての不動産購入を、土地の所有者と一度も会うこともなく、その代行をしてくれた人とも一度限り顔を合わせるだけ**。ここはそういう世界である**。

村上が現地に着くと、安藤さんはすでに到着し、車で待っていた。物件を前にして色々と話を聞かせてもらったが、最も驚いたのは、村上がここに浄化槽（生活排水を処理する箱のようなもの）を設置する可能性を考慮して、物件から流れ出た雨水が側溝を通って市道のほうまで続いているかどうか、歩いて確認したという話。
「今後、仮に浄化槽を設置することがあったら、北側の側溝に流すようにすれば問題ないです」
とさらっというので、そんなことまでしていただいてありがとうございます、とお辞儀をしたら安藤さんは、**いやいや仕事ですから**、と流した。村上は『不動産仲介人』というドラマの主役を見ているかのような気持ちに。
そのうえ安藤さんは隣の家のチャイムを押して、住人からこのあたりのことも聞いてくれていた。
「気さくな方でしたよ。電話番号も交換しました」
と安藤さん。これが不動産のプロなのか。
その住人いわく、「もう何十年も住んでるけど、ここに家が建っているところは見たことがない。隣の空き地は年に 3 回くらい、夫婦で草刈りに来てる」とのこと。「ちなみにいくらで売れたの？」と聞かれたので、安藤さんが金額を伝えたら、「そんなに安くなってんの！」と驚いていたという。まあ、自分がいま住んでいる土地の「値段」なんて、考えないだろう。この MacBook Pro がいまいくらで売れるのかなんて考えないのと同じように。

さて、村上が契約のついでに現地まで来たのには、「現地の土をアトリエに持ち帰る」という目的があった。なぜ土が必要なのか。今回のプロジェクトでは「版築」と呼ばれている方法で家を作ることにしたからである。版築とは何か、なぜそれに至ったのか、経緯を以下に示す。

版築について

<6 月 29 日>
●「夏の家冬の家」の構法に関して
壁を「版築」でつくればいいのではないかと思いついた。
版築とは、**土を型枠の中に少しずつ入れ、上から突き固めることで強度のある壁をつくる、昔ながらの方法**である。
手始めに前橋工科大学がまとめたリーフレット『版築―今甦る、土の建築―』を買って読んでいる。これがかなり面白い。《夏の家》のほうを版築で作ればいいのではと思って読み始めたけど、版築の蓄熱性能の高さを考えると、冬の家もこれでいいのではないか。つまり、**夏の冷房と冬の暖房を備えた小屋をひとつ作ればいい**のではないか。
読めば読むほど、土、すごい。蓄熱性能、断熱性能、調湿性能、どれもすばらしいし、なにより**その土地を掘り返せば材料が手に入る**というのが良い。冬の家も、このなかに暖気を取り込めれば暖かさをキープできそう。土で作った家の暖房が、落ち葉の発酵熱というのは、かなりキャッチーで面白いのではないか。そんなことをやっている人、会ってみたい。

日本ではあまり一般化しなかったけれど、ヨーロッパにも中国にも版築には古い歴史があるという。ドイツでは2度の世界大戦の影響で建材が不足し、しかし急いで住宅住宅を建てる必要があったため、土の住宅がつくられた。いまでも建築施工の方法として版築が許可されていて、合法的な建築方法の一つになっているという。6 階建ての版築の建物も残っているらしい。**万里の長城も、煉瓦の焼成が工業化されるまでは版築だった。**

昔はいまと比べて資材の輸送に莫大なコストがかかっていたので、遠いところから材料を持ってくるという選択肢はなかった。だからその場でとれる自然のものが使われていた。

いま、建材はそういうものではなくなってしまった。石灰岩を酸化アルミニウムと一緒に 1450 度という高温で焼成し、そこから結晶水を抜き取ると、硬質な、加工しにくい、吸水性のある「セメント」が生まれる。セメントはいわずもがなコンクリートの材料だけど、最初は「自然」の状態にあった原材料が熱や化学変化を導入することで変化すればするほど、環境に対して孤立する、と冊子に書いてある。

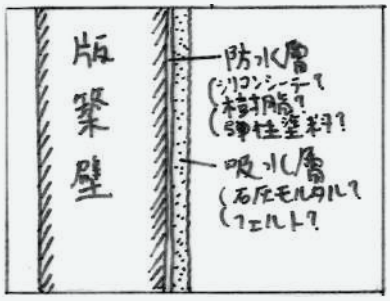
「環境に対して孤立する」という言い回し、しびれる。プラスチックもそうだけど、ふだん身の回りにあるものは環境に対して孤立しているものがほとんどだ。

落ち葉を集めたときのことを思い出す。アスファルトが環境に対して孤立しているせいで、本来はそのまま放置しておけば土壌になる落ち葉を、路上に放置しておくことができず、**わざわざかき集めて、可燃ゴミで燃やしている**。ばかげている（ちなみに武蔵野市では、落ち葉ゴミの堆肥化を進めているらしい。いいね）。

環境に対して孤立しているアスファルトのほうがむしろ「環境」になってしまっている現状なので、落ち葉のほうが孤立しているように見えているのだ。

今年、6 月の時点でこれだけ暑くなっていても、つつじヶ丘駅前の雑木林の一部をアスファルトで固める工事をしているし、なんか、ほんとうになんとかならないもんなのかこれは…。**もしかして我々はものすごーーくばかなんじゃないか？**

壁の構法に関してはこれまで、
・無釉の陶器タイル（名古屋でやったもの）
・セメントタイル
・ラバーマット
・コンクリートブロック
・小石(川石を金網でサンドイッチして、そこに水を流す)



(図 11)
水を浸み込ませる層を分けることによって、版築壁へのダメージを軽減させるアイデア

などの可能性を考えていたけど、セメントを使うコンクリートブロックやラバーマットなどの工業製品は**なにか違う**気がする。せっかく自然現象を使って冷暖房を作ろうとしているのに、工業製品をメインに使ってしまったら元も子もないではないか。その点、版築でできれば、コンセプトに整合性がでてくる。

夏の家は水の気化熱を使うので、壁に水を沁み込ませる必要がある。それを版築でやるとしたら**水との共存が最大の課題**である。版築は基本的に**土を突き固めるだけなので、水には弱い**。壁を二層構造にすればいいのではないかと思う。版築壁には蓄熱機能だけを担わせて、吸水層を別につくる。吸水層は石灰モルタルとか、フェルトなどが考えられる。そして吸水層と蓄熱層のあいだに水を遮断する何らかのものを入れればいいのではないか？（図 11）

《夏の家　冬の家》計画に関する報告書 **No.2**
作成者:村上 慧
2022 年 8 月 13 日

このリーフレットのなかに、遠野未来さんという、版築に詳しい建築家が登場する。僕は遠野さんに思い切ってメールを書いてみることにした。

(6月29日に書いたメールより)

遠野未来様

初めてご連絡を差し上げます。村上慧（さとし）と申します。
前橋工科大学発刊の冊子『版築-今蘇る、土の建築』を読み、遠野さまのことを知りました。突然にメールを送る無礼をお許しください。

私は主に美術作品を作っているアーティストです。2011年に武蔵野美術大学の建築学科を卒業し、現在に至るまでアーティスト活動を続けております。遠野さまのこれまでの実践や、建築に対する考えかたに惹かれるものがあり、とにかく一度お会いしたいと、そう思い、勢いでメールをしたためております。
私はいま準備中のプロジェクトで「版築」を使うべく、準備を進めています。以下に、簡単な私の自己紹介と、準備中のプロジェクトについての概要を記述いたします。お忙しいところたいへん恐縮なのですが、もし私の活動に多少なりとも興味を持っていただけるならば、一度お会いして（私が事務所まで伺います。オンラインでも構いません）お知恵を拝借できれば幸いと思い、。遠野さまの長年の経験を思えば、手軽に話を聞こうとすること自体、図々しいお願いなのですが、読んでいただけると嬉しいです。

（中略）

ー準備中のプロジェクトについてー
《夏の家 冬の家》というプロジェクトです。版築を使った小さな書斎を作ろうとしています。大きさは建築確認申請を回避するため10平米に抑え、場所は千葉県山武市の140平米程度の土地を予定しており、現在購入手続き中です。
その書斎には、雨水の気化熱を使った「自然冷房」と、落ち葉の発酵熱を使った「自然暖房」を組み込もうとしています。**（知人向けにメールで送ったPDF形式の「報告書」を添付しますので、よければご覧ください）**

＜自然冷房について＞
昨年の夏名古屋にて、あるプロジェクトの一環で、素焼きのテラコッタタイル（イタリア製）を外壁に用いた小さな小屋をつくりました。それはタイルに雨水を浸透させることで、気化熱でタイルが冷え、室内の温度を下げる自然冷房が組み込まれていました。室内はそれなりに冷やすことに成功しましたが
・タイルが高額なこと
・期間限定のプロジェクトだったので、工夫の余地がまだまだあるのに終わらせざるをえなかったこと
・なにより、もっと土着の材料で実現させたいこと
などの理由から、土地を購入して腰を据えてやりたいと考えました。
＜自然暖房について＞
今年の1〜2月札幌にて、同じプロジェクトの一環で、農業用ビニールを用いた小屋をつくりました。そこには落ち葉が発酵するときに出る熱を利用した自然暖房が組み込まれていました。真冬の札幌にも関わらず、発酵熱をつくることには成功しました。発酵槽内温度は最大で60度を超えました。しかし
・ビニールで作ったので、せっかくつくった熱が蓄熱されなかったこと
・こちらも期間限定のプロジェクトだったので、工夫の余地がまだまだあったこと
などの理由から、「自然冷房」と同じく、購入した土地で腰を据えてやってみたいと思いました。

そこで版築を使えば、名古屋と札幌で行った「自然冷房」と「自然暖房」を両方兼ね備えたものが作れるのではないかと思いました。暖房のほうは、版築小屋のそばに落ち葉の発酵温床を作り、アースパイプで熱を取り出す仕組みが作れればできそうなのですが、ご相談したいのは、おもに冷房の方です。

＜相談したいこと＞
雨水の気化熱を使った自然冷房を組み込んだ、版築の小屋を考えています。ただ、版築は水が大敵であることは、ほとんど経験のない私でも想像ができます。（私自身の版築の経験としては、昔一度バーベキューコンロを作ったことがあるくらいで、それもすぐにぼろぼろとくずれてしまうような代物でした。これから実験を重ねて、土という素材に馴染んでいきたいと思っています。手を動かす前からこのようなメール送ってしまい、申し訳ありません…）
壁に直接水がしみ込むのを避けつつ、同時に気化熱による冷却効果を版築壁に持たせるために、壁を2~3層構造にしたらどうかと思っています。版築壁を蓄熱層として、その上に吸水層（石灰モルタルや、フェルトなども考えていますが、まだ机上の空論なので、これから実験をしていきます）をつくり、蓄熱層と吸水層のあいだに、水を遮断するなんらかのものを挟めたらいいのでは思っていますが、版築壁の収縮のことを考えるとどんな素材がいいのか、計りかねています。

遠野さまには、版築の基本的な考え方や、開口部を作る際の注意事項や、上述の冷房に関してなにかアイデアがあればなどをお聞きしたく存じております。（前橋工科大学のブックレットは読みやすく、とても参考になったのですが、掲載されている写真が白黒だったので、可能ならカラー写真も拝見できればと…）

長々と書いてしまい、申し訳ありません。（中略）お力添えをいただけましたら幸いに存じます。

末筆ながら、暑い日が続いておりますので、何卒お体ご自愛のうえお過ごしください。

村上慧拝

このメールを書くのに、たぶん3時間くらいかかった。会ったことのない人にメールを書くのは緊張するとはいえ、時間がかかりすぎではないか。こんなんで大丈夫なのか。社会人として…。世の社会人（もとい会社人）たちは、会ったことのない人にメールを書きまくっているはずだ。1 日に何通も。
たくさんの案件を同時に抱えていて、案件ごとに時間を割り振り、頭を切り替えて仕事をしている。そんなイメージ。案件 A の仕事をしているときに案件 B の人から連絡があっても、それが緊急でない場合はひとまず置いておいて、案件 A の用事を済ませることを優先し、場合によっては案件 C とか D とかまで終わらせてから、A に頭を切り替え、返事をすることができる。それが社会人（もとい会社人）である。
遠野さんからはすぐに、協力できることがあればしたいです、いま移動中なのであとでゆっくり企画書を読んでお返事します、という旨のメールが届いた。失礼なメールを送ってはいないかとやきもきしていたので、とりいそぎ返事をくれてほんとうに嬉しかった。

版築レンガの試作

それから村上は版築の試作にとりかかった。その経緯を以下に記す。

<7 月 4 日>
・ホームセンターで消石灰 1kg を買ってきた。これから**版築レンガ**を作ってみる。
・版築レンガ試作
まず、前橋工科大学のブックレット（版築の基本的な作り方が書かれていて、ありがたい。**仏壇に供えたいほどである**）を参考に、版築に適した土は深さ 50 センチ以上のものが望ましいということだったので、アトリエの庭に鍬とスコップを持って突入した。しかし湿度が高いせいか、おぞましい数の蚊の軍団に襲われ、早々に退散。おそろしかった。蚊の「逆ビュッフェ状態」だった。草むらに立ち入ってものの数秒で、足元に 3〜5 匹くらい飛んできた。戦おうという気にもならない。
しかし運のいいことに、ちょうどアトリエの向かいの空き地で大規模な建設工事が行われており、残土が山積みになっていることを思い出す。ビニール袋とスコップをもって、土をもらいにいってみた。
現場はもう作業を終了しており、一人だけ残ったおじさんが後処理的なことをやっていた。そのおじさんに、すいません、と話しかけてみた。

「土を一袋ぶんだけもらうことってできないですかね？」
「どの土？」
「あの残土っていうか、そこに積まれてるやつ」
「ああ、あれならいいっすよ。そっから入ってください」
現場にはごっそり掘られた穴がどーんとあいており、その隣に残土が山になっていた。
「ここからとって大丈夫ですか」
「あんまいい土じゃないけどな、砂利混じってる」
「でも深いところの土ですよね」
「そう。そっから出したやつ。（部外者を、穴の）下に降ろすと怒られちゃうんだよな、ははっ」
「じゃあこっからもらいます。ありがとうございます」

余談だが、この工事現場は村上にとって近づきたくない場所の一つだった。
ここはもともと広いコインパーキングで、その敷地と道路の境界あたりに、大きな桜の木が二本立っていた。毎年春には圧倒されるくらいの見事な花が咲いて、通りすがりの人々はみんな写真を撮っていた。四季の巡りを感じさせる、大事な存在だった。街の樹、みんなの樹だった。
しかし先月コインパーキングが取り壊され、更地にする工事が気づけば始まっていた。桜が切られやしないかという心配はあったが、敷地のキワに生えているので大丈夫だろうと思っていた。しかし抜かれた。
というよりも、むしり取られていた。

《夏の家　冬の家》計画に関する報告書 **No.2**
作成者:村上 慧
2022 年 8 月 13 日

五本の赤い鉄のツメがアームの先についている恐竜みたいな重機が、桜の幹をその途中から割り、えぐり、白い中身がむきだしにされていた。これを発見したとき、久しぶりに混じり気のない怒りが沸いてくるのを感じた。純粋な怒りは無色透明なのである。通りすがりの人たちもみんな、うわあ…とか、え？…とか呟きながら写真を撮っていた。あるおばちゃんは「ひどいことするわねえ」「ミサイルが飛んできたのかと…ウクライナのこと思い出しちゃった」と言っていた。
とはいえ工事現場の人たちはなにも悪くない。少なくともこの人は、親切に土をゆずってくれた。このくそ暑い屋外で多くの時間を過ごしていることが一目でわかるほど陽に焼けた、土方という仕事を絵に描いたようなおじさんから「ははっ」と笑いかけられたときは、自分でも驚くほど嬉しくなってしまった。

(図 12)

(図 13)

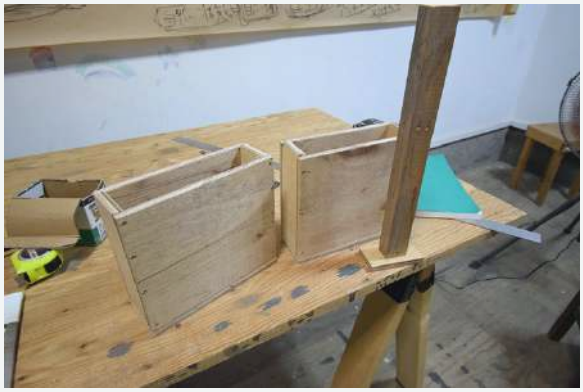
(図 14-1)

(図 14-2)

とにかくそうやって、村上は汗をかくことなく約 7.6kg の土を手に入れた(図 12)。土はかなり石が混ざっていたので、園芸用のふるい（網目の幅 3-5 ミリ）でふるった(図 13)。一部、粘土室の土が固まった塊もくずしつつ。
ちなみブックレットによると、粘土（0.002mm 以下）・シルト（0.002~0.02mm）・砂（0.02~2mm）・礫（2~20mm）・石（20mm 以上）の**粒度のばらつきがバランスよくあること**が、版築には望ましいという。なかでも粘土質が大切なようなので、もらってきた土に見たところ粘土が多そうなのは、ラッキーだった。
ただし、これは実際にプロジェクトを進める現場の土ではないので、あくまでも**参考に**作ってみるということである。購入する土地の土が版築に適しているかどうかは、ある種の博打である。土の質で土地を選んだほうがいい、なんてことは農業以外の用途では想像したことがない。仮にこれから版築が爆発的に普及するようなことがあれば、土の質で土地の値段が変わる時代になるのだろうか。

ふるいにかけた後の土を 3.8kg ずつの二つのかたまりにわけ、それぞれに消石灰 330g（質量比約 8.5%）と 660g（約 17%）を入れ、よく攪拌させた(図 14-1,14-2)。消石灰は土の粒と粒をつなぐ接着剤となり、入れるほど結合が強くなる？ようだが、そのぶん完成後の見た目は白っぽくなり、土の印象からは遠くなるとのこと。ちなみに、インターネットで版築を検索すると、土に対して消石灰 50%とかで作っているひとも結構いる。
ブックレットに載っている版築は土に対して消石灰 10 %で作っているものが多かったので、ここではそれを参考に二種類の比率で試してみた。

(図 15)



(図 16)

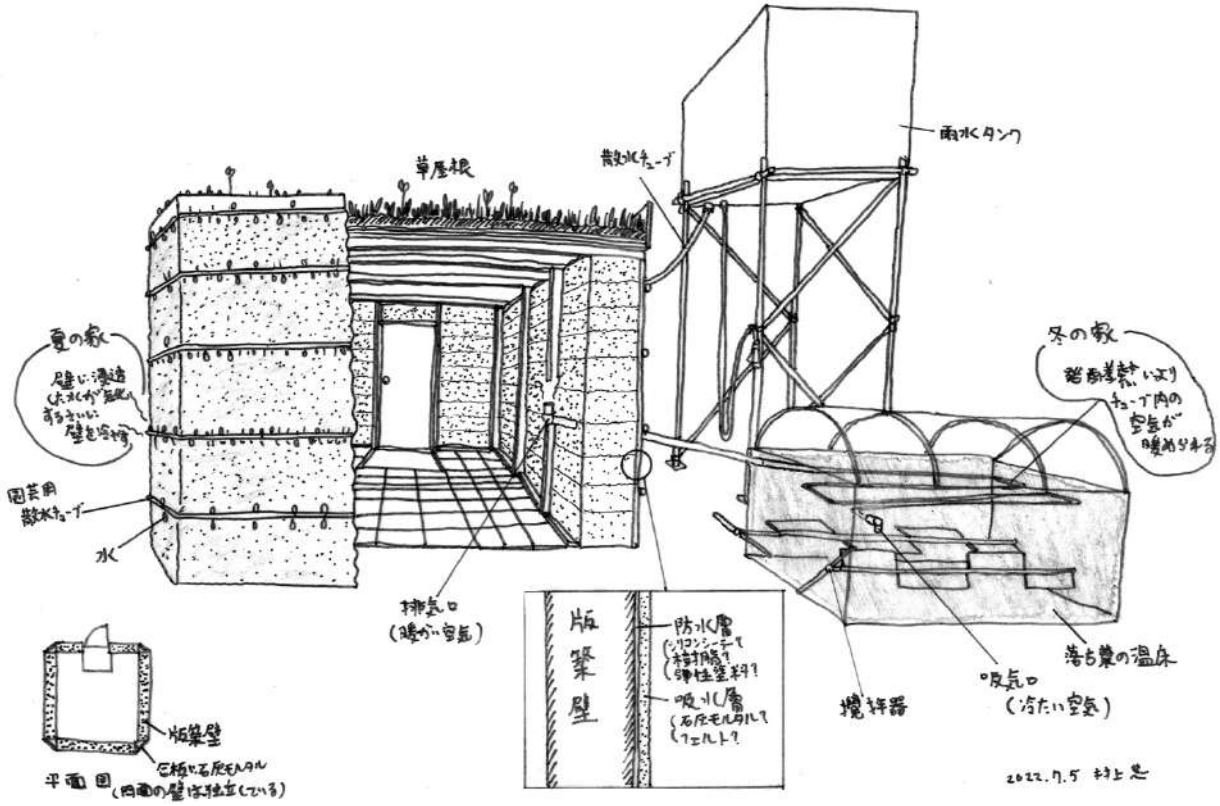
(図 17)

(図 18)

この二種類の土に水を加えてまた攪拌する(図 15)。水の加減は、これまたブックレットによると、「手で握って軽くかたまりができる程度」らしい。これが難しい。一度、ちょうどいい水加減の土というものを見てみたい。
それから厚み 6cm、縦 10cm、横 21cm の型枠をふたつ、厚さ 12mm の合板で制作(図 16)。それぞれに土を入れ、木で自作したタンパー（叩く道具）で、型枠内の土を叩く(図 17)。タンパーを手で持って、とんとんと落とすように叩く。
土は 10cm くらい入れて、叩く前の5～6割くらいに圧縮されるまで叩くのがいいとのことだが、正直これは適当にやってしまった。**というか、そんなに沈まなかった**。「もうこれ以上沈まねえ」となるまでは叩いたが。終わったら次の層を入れ、また叩くを繰り返す。
型枠いっぱいいっぱいまで土が詰まったら、乾くのを待つ(図 18)。ブックレットで版築の解説をしている遠野未来さんのブログに、版築レンガを試作したときのことが書かれており、そこでは仕込んでから三日後に枠を外していた。明日以降、土の渇き具合をみながら枠を外すタイミングを決めることにする。外すのが楽しみすぎる。

この翌日、遠野さんから「版築の企画面白そうですね」というメール。共感するところ多々ありますとのこと、嬉しい。今考えているスケジュールと、考え方がわかるおおまかなスケッチがあるとありがたいと書かれていたので、この機会に描くことに。(図 19)

《夏の家　冬の家》計画に関する報告書 **No.2**
作成者:村上 慧
2022 年 8 月 13 日



(図 19)版築の壁に水をやるための方法として、家庭菜園用の散水チューブ(ホースに細かい穴があいていて、水圧をかけると水がぴゅーっとふきだすようなやつ)を使っているのがポイント

—

遠野さま

お世話になります。興味を持っていただけたようで嬉しいです！ありがとうございます。

いま考えているアイデアをスケッチにおこしてみました。
以前添付した「報告書」では、「夏の家」と「冬の家」をそれぞれ別につくるような書き方をしていますが、いまは一つの版築の家を夏も冬も使えるようにする方向で考えています。
●貯めた雨水を、外壁にぐるりと取り付けた散水チューブを通して壁に浸透させ、壁を冷やすことで屋内を冷やす「夏仕様」
(水を壁にしみ込ませたいのですが、版築壁を痛めたくないという矛盾の解決が現状最大の課題です)
●落ち葉を発酵させ、その温床内にチューブを通し、外気を温めて版築の家の中に取り込む「冬仕様」
このふたつの機能を、一つの版築の家で成り立たせる感じです。ちなみに版築小屋の大きさは 2700mm 四方に高さ 1800~2100mm くらいで考えています。

スケジュールは、あってないようなものなんですが、ざっくりと以下のような流れで考えています。最終的に来年の秋頃までに「成功」と言えるところまで持っていくのが目標です。
2022 年
7 月　千葉県山武市の土地を購入。現場の土を都内のアトリエに持って帰り、版築ブロックを試作し、版築壁と吸水層の両立のための実験。
8~9 月　暑さや天候を鑑みながら、「夏の家」のための現場作業？
10 月~2023 年 3 月　「冬の家」の制作。落ち葉集め、温床作りなど。畑づくりも。
4~9 月　ふたたび「夏の家」の作業。ここまでに「真夏の日中でも屋内で快適に過ごせる」ところまで持っていきたい。
10 月~ 「夏の家 冬の家」を日常的に利用する
なにか不明な点があれば、なんなりとおっしゃってください。よろしくお願いいたします。
—

《夏の家　冬の家》計画に関する報告書 **No.2**
作成者:村上 慧
2022 年 8 月 13 日

7 月 8 日に遠野さんからお返事。いま忙しくてじっくり考えられていないとのことだが、返事をくれて嬉しかった。遠野さんは建築基準法上も問題のない版築を目指して色々と検証を進めており、今回のプロジェクトも、構造的にどう考えるかが問題ですと書いてくれていた。以下の返事を書いた。

—

遠野さま

お忙しいところ、お返事ありがとうございます。
今回のプロジェクトでつくる版築の小屋ですが、(ひとまず一軒目は)最低 5 年くらい保たせられればいいのかなと思います。
短い期間かもしれませんが、わたし一人が出入りするだけの場所というよりは、時々友人を招いたりもしたいと思っています。なので遠野さんのスタンスは大変心強いです。
すこし思うのは、(慣れない版築にいきなり構造壁をやらせるのは怖いので)版築に構造を担わせるのではなく、自立する骨組みを木でつくり(屋根もそこにのせて)、版築の壁は蓄熱と断熱に専念させるという方向性がいいのかなと。あとで版築の壁だけつくりなおしたりもできそうなので。
ぼくも版築レンガをつかって少しずつ実験を進めています。引き続きよろしくお願いします。

—

<7 月 8 日、先日つくった版築レンガを脱枠した>

(図 20)

(図 21)

消石灰の割合がすくないレンガ(図 20)は、出してすぐに割れてしまった。特に角の部分はほとんど全部とれてしまっている。突き固めも甘かったと思われる。角は重点的に叩かないといけないのであろう。
消石灰が多い方のレンガ(図 21)は、ほとんど真四角の綺麗なものができていた。角もほぼ無事である。色合いも、思っていたよりもずっと茶色く土っぽい。消石灰はもっと足して作ってもいいかもしれない。
それにしても、ただ**土を突いて固めただけでこれほどカッチリしたものができるとは**…。しかも、まだ 1 回目である。できあがったレンガはひんやりと冷たく、冷房として使えそうな予感しかしない。土のポテンシャル、無限大すぎる。

＜突然のコラムコーナー＞

暑い。毎日気温がおかしい。アトリエの作業部屋にはクーラーがない。きつい。例えば配合比を変えて、版築レンガを新しくつくりたいと思っても、作業としてはせいぜい 1~2 時間なのに、できない。どうしてもできない。のらない。なのでクーラーのある部屋にいがちである。先日も前回の札幌のプロジェクトで助成を受けた財団「住総研」への報告書制作が滞りまくっているので、今日こそは着手しようと意気込んでパソコンの前に座ったのだが、なぜか『チ。-地球の運動にすいて-』という漫画を読み始め、2巻まで読みおえてしまった。近所の本屋には 3 巻からしか在庫がなかったのである。だからネットで読んでしまったのである。
ちなみにその前の週には3日ほどかけて『20 世紀少年』を全巻一気読みした。目の前の現実がいろいろと大変すぎるのでなにか、なにかフィクションを強烈に欲している。きびしい。きびしいたたかいを強いられている。

そして、舞台のうえで演じられる悲痛なできごとや、こっけいな事件に聞き入っている と、ふしぎなことに、ただの芝居にすぎない舞台上の人生のほうが、じぶんたちの日常の生活よりも真実にちかいのではないかと思えてくるのです。みんなは、このもうひとつの現実に耳をかたむけることを、こよなく愛していました。
(ミヒャエル・エンデ『モモ』大島かおり訳)

出先の本屋で目についたエンデの『モモ』も文庫で買って読み終えてしまった。『リーマントリロジー』もBunkamura で観た。観たいものが多すぎる。しかし全ての映画をみることはできない。全ての本を読むことはできない。全ての展覧会をみることはできない。きびしい。
それにしても、**生きるだけでなぜこんなに大変なのか**。われわれは牧畜と農耕という技術を習得し、労働時間を大幅に削減することに成功したのに、なぜこんなにばたばたとしているのか。自分が毎日なにをしているのかもわからないまま、ふりおとされないように目の前のタスクをこなし続け、たまの銭湯に幸せを見出してつつましく暮らしているのに、**めちゃくちゃ暑いし、情報がいじめてくる**。
気候変動と政治・宗教問題と差別、戦争。人類、問題が多すぎではないか？そしてその問題の多くは、様々な原因がごちゃごちゃ作用しあっていて、もはやなにがなんだかわからない。絡まりすぎてボールみたいになってしまった釣り糸のような状態である。
加えて、「なんかだるい」みたいな個人的な体調の問題もふりかかってくる。その原因だってよくわからない。腹立たしいことに、われわれは**自分の不調の原因すらわからないのである**。
『あなたの身体は9割が細菌』という本によると、僕の腸内には数百兆の細菌がいるし、この足の指先にもイギリスの人口より多い微生物がいるという。このからだは無数の微生物と細胞と、それらの間でおこる気の遠くなるほどの信号によるネットワークもろもろによって維持されており、われわれはそれについてほとんど何も知らないし、意識もできない。意識できるのはそれらの運動の「結果」ばかりである。スピノザの「ものごとのすべては必然的におこるのであって、他のありようなどはいっさい存在しない」という言葉はこういう意味である。逆に考えれば、体調がわるくなったり、落ち込んだりするのは、いわゆる「自分」のせいではなく、「腸内細菌のバランス」や「気圧」「免疫力」「朝ごはんにバナナを食べたか」などの様々な原因によって引き起こされる、**機械的で必然的な運動の結果**である。
われわれはただ、自分の体調を悩ませる「原因」に対するひとかけらの自覚も持てず、起きた出来事の「結果」をこうむるばかりの毎日である。そりゃあ落ち込むのも無理がない。「感情」とは、常に受動的なものなのである。だから、悲しみにとりつかれそうになったとき、それは機械的に起きた必然なのだと、**能動的に説明してみることが大事**なのである。この**「能動的であること」が、人生においてもっとも重要なことである**。
「食べること」について考えるとわかりやすい。外では美味しいと思って飲んでいたペットボトルのジュースを飲みきれなかったとき、家に持ち帰って飲むと、あんまり美味しくないことがある。なにか魔法にかけられていたような、錯覚を起こしていたような気持ちになる。それは、外では自ら進んで口に入れていたが、家では環境によって飲まされているからである。しかし、このような「商品」を買って口に入れること自体(それがいかに、いくつかの選択肢のなかから自分の自由意志で選んだのだと思っていても)、受動的なふるまいであることから逃れられない。そこに「制作」がなければ能動的とは言えず、歓びもない。この場合、制作とはつまり料理をすることである。料理とは未来への賭けであり、能動的に食べるには必要な行為だ。それがいかに味のいいものだとしても、受動的な歓びは錯覚である。
なんだかいろいろ書いてしまったが、とはいえこの暑さのなかで能動的になれなんて、無理な話である。人間が仕事をするような環境ではない。**これから日本はどんどん暑くなるので、いまがどれだけ暑くても今後数十年を考えれば今年は一番涼しい年である**、という文言を Twitter で見かけ、絶望的な気持ちになった。
思えば《夏の家》というプロジェクトの計画を立てたり参考図書を読んだりするのに、ぼくはクーラーの効いた部屋をつかっている。クーラーの効いた部屋で、クーラーを使わない冷房を考えている。
なにをするにせよ、「拠点」は必要だということだ。**快適な拠点があって、はじめて人はものをかんがえることができる**。それが「家」の定義だと言ってもいい。ヴィレム・フルッサーも言っていた。慣れた場所がなければ、つまり「帰る場所」がなければ、われわれは何も経験できないと。

家を作るにはそれを考えるための家がまた必要になるということだ。それがこのクーラーの効いた家だ。そしてこの家は、誰かの手によってつくられたものだ。大工さんと、設計士と、きこりと、種々の工場労働者と、トラック運転手と、水道電気ガス会社の職員のみなさん、本当にありがとうございます。

<突然のコラムコーナー>おわり

<7 月 12 日>

ようやく涼しくなったのでレンガ制作の続きをした。まず前回作った二種類のレンガ(**いつ手にとっても冷たくて感動する**)はそれぞれ土に対する消石灰の割合が 8.5%と 17%だったが、今回はその余りの土を合わせて混ぜ、消石灰の比率 30%にした土を作り、二つの型枠で突き固めた。

その後、前回作ったレンガ二種類に水性シリコンシーラー(ペンキの下塗りとかに使うやつ。図 22)を塗ってみた。すぐに乾き始め、防水能力はかなり上がったように見受けられる(図 23)。これに石灰モルタル(セメントを使わない、消石灰と砂と水だけで練ったモルタル)を塗って吸水層をつくれば、版築壁に水を浸透させずに水の気化熱を利用することができるのでは、というねらい(図 11)。

しかしここでひとつ思うことが。せっかく土に還る壁をつくっているのに、防水のためとはいえシリコンをつかった合成樹脂なんぞを塗っていいものなのか。ここまできたら、**できれば使いたくない**。とりあえず今回塗った二つのレンガはこのまま石灰モルタルを上塗りするとして、新しく仕込んだ消石灰 30%のやつは、シーラーを塗らずに石灰モルタルだけでなんとかならないかやってみる。

(図 22)

(図 23)

<7 月 18 日>

12 日につくったレンガ二つを脱枠した。消石灰 30%の土は、水を加えずに空練りしていた状態ではとても白くて、土とは思えない色だったのだが、固まったものをみると茶色っぽくもどっている。圧力がかかりにくいせいか、やはり角はすこし欠けてしまっているけど、できたレンガは硬く、**このまま土に還るものだとはにわかに信じがたいほど**である(図 24)。　*(↓図 24)*　　*(↓図 25)*

むかしの人々はこの土を固めただけのもので万里の長城を建て、高さ数十メートルの建物を建てていた。現代と比べてどちらが文明として進んでいるのか、もはやわからない。
それから先日シーラーを塗った消石灰率 16%のレンガと、出来上がったレンガふたつのうちひとつに石灰モルタルを塗った(図 25)。ネットで石灰モルタルの情報はあまり出てこなかったのだが、『七曜工房みかん島』というブログに容積比で川砂と 1:1 で混ぜ、水を加えて練ると書かれていたのでそれでやってみた。ちなみに、**餅米を加えると強度が上がる**らしく、万里の長城はそうしていたという。

(図 26)14:38 撮影

(図 27)16:36 撮影

<8 月 1 日>
つくった版築レンガの「水耐久実験」を行った。レンガに表面温度計を貼り、水を温度計の反対面から 1 時間、ちょろちょろとホースで与えつづける。この日は「**消石灰 30%、シーラーなし、モルタルあり**」のレンガでやってみた。版築レンガがはたしてどの程度水に耐えられるのか、その感触を知るためである。表面温度計はあくまでも目安として、気温に比べてどのくらいレンガが冷たくなるのかをみるため。
13 時 50 分から水やりを開始し(図 26)、14 時 55 分に水をとめた。
<わかったこと>
・水を 1 時間与え続けたが、意外と版築レンガは崩れなかった(図 27)。思っているよりもはるかに版築は水に強いのではないか？という予感。表面温度は、16 時 36 分時点で外気温 36.6 度に対して 34.0 度。この翌朝 8 時半まで温度経過を記録したが、通して外気温より 1~2 度低い状態であった。

(図 28)10:45 撮影

(図 27)12:15 撮影

<8 月 2 日>
レンガ水耐久実験二日目。この日は**「消石灰　30%、シーラーなし、モルタルなし」**のレンガに前日と同様水を与えた(図 28)。10 時 35 分に水やりを開始し、11 時 50 分に停止(図 27)。しかしレンガはほとんど崩れていなかったので、追加で 18 時 15 分に水やりをして、18 時 55 分に停止。
<わかったこと>
・昨日と違ってモルタルを塗っていないレンガだったが、ほとんど崩れなかった。どうやら版築の強さをみくびっていたようである。この日、版築を普通にちゃんとつくれば、別にモルタルを塗るなどの小細工をしなくとも、水の気化熱で冷える壁を作ることはできるという感触を得た。
・今年、あまり雨がふっていない。雨水をうまくためて壁を冷やせればと思っていたが、ちょっと無理がある気がしている。《冬の家》にしても、発酵熱を作るためには水が相当量必要になる。
ということで、**井戸の掘りかたを調べはじめた**。塩ビ管を使っての自作井戸のつくりかたがネットにいくつかのっている。自分でも掘れそうだが、水が出るかどうかは賭けである。幸い近くに川が流れているので、やってみる価値はある。

ふたたび現場のはなし

このように版築レンガを試作してきたが。これらはあくまで東京のアトリエの近所でもらった土である。土は場所によって全然違う。現地の土で試さなければ、結局は何もわからない。そこで土を手に入れるべく、「ケンハウジング」での契約のついでに現地まで来たのである。ということで、話は本報告書 14 ページに戻る。
安藤さんと別れ、村上は持参したクワとスコップとタライで現地の土を持ち帰ろうとした。そのためには 50cm 以上の深さまで掘る必要がある。土に有機物が含まれていない方が、版築には向いているからである。

(図 28)

(図 29)

しかし現場は、予想を遥かに超えて草がボーボーに生えていた(図 28)。まず草を刈らなかければ話にならない。手持ちの道具ではまったく太刀打ちできず、現場から車で 5 分のところにあるコメリ(ホームセンター)で草刈機を買おうとするも、店が小ぶりで良いものがなくて、代わりに 200 円の鎌(**やすすぎる。**心配だ。しかし「最初だから」と思って、つい一番やすいものを選んでしまった)を買って現場に戻った。
さいわい天気は曇り、屋外作業には向いている日だった。1 平米ほど草を刈り、鍬とスコップで土を掘ろうとしたが、まったく歯が立たなかった。一度も家が建ったことのない地面で栄えに栄えた雑草たちの根のネットワークは非常に強固で、スコップは刺さらず、クワの爪は曲がった。
植物たちが、まるで土を守っているようだった。すこし掘り返しただけで草陰から数 mm～5cm ほどまでバリエーションの揃った**クモ**やら、**アリ**やら、**ダンゴムシ**やら、**ミミズ**やら、**黄金虫**、**芋虫**、**なにかの幼虫**、**各種甲虫**、**各種節足動物**などなどが、ゴジラから逃げる東京都民みたいにわさわさと出てきて、草陰に消えていった。地中で眠っていた芋虫たちは逃げることができないのでそのままうずくまり、運命を受け入れていた。

村上はこの上なく申し訳ない気持ちなった。土地を買うとは、こういうことかと思った。ここでずっと暮らしていた虫たちを大量に虐殺し、追い出すこと。その資格がはたして自分にあるのかと。
草の根のネットワークは、彼ら小さな生物たちにとっては家であり、栄養源でもある。反対に植物にとって虫たちは、花粉を運んでくれる共生生物であり、**世界はそこで完結している**。そこに村上というヒトが割り込む余地はあるのか。彼らの循環のなかに入れてもらうためには、どうふるまえばいいのか。
深さ 50cm の土を大量に手に入れるには、ユンボをレンタル重機屋で借りて土を掘り返すのが一番早い。村上は 3t 未満のユンボなら運転できるので、そうしようと思っていた。しかし逃げ惑う虫たちを目の当たりにしたいまとなっては、重機を投入するのは**あまりにも非人道的なことに思える**。ユンボに乗ると視線が高くなり、自分がやっていることがいかに彼ら虫たちにとって一大事かがわからなくなってしまう。そんなことをしたら本当にゴジラになってしまう。せめて人力で逃げ惑う彼らをこの目に焼き付けながら、土を掘り返すのが人の道というものではないか。
などと考えていたのもあり、草の根バリアが強固なこともあり、作業は進まなかった。結果としては**1平米くらいの土の表面をすこし削っただけ**であった(図 29)。当然土を持って帰ることはできなかった。次は道具を揃えて、泊まり込む覚悟で臨まなければならない。ひとつだけ、現地の土を触ってみて、細かい粘土分が多そうだということはわかった。
帰りにカインズホームに寄り、草刈機を物色した。店員のおじさんとおばさんから、まるで親戚がやっている金物屋に来たみたいな雰囲気で各種草刈機の違いを聞き、一つ決めた。しかしここ数週間で草刈機はばんばん売れているらしく、僕が目をつけた商品はもう在庫が切れていた。全く同じ値段の同じものが楽天市場で売っていたので、そちらをポチった。カインズホームのおじさんとおばさんごめんなさい。

生坂村の版築ワークショップ見学

以上のような道のりを経て版築についてすこしずつ覚え始めていた村上だが、ここまでは完全に独学である。誰かが版築でなにかをつくっている現場は見たことがない。経験豊富な人の仕事を一度は見てみたい。ということで村上は 8 月 6 日から 7 日にかけて長野に行ってきた。遠野未来さんが版築のワークショップに誘ってくれたのである。

<一泊二日長野版築探訪記>
8 月 6 日。遠野未来さんにご案内をいただき、長野県生坂村での**「いっしょにつくろう!!ロケットストーブ式版築アースオーブンワークショップ」**に参加してきた。
この日が第一回目で、これから隔週土曜日に集まってレンガを積んだり土を突いたりして版築オーブンを作っていき、10 月には完成したオーブンでピザを焼いたりする「収穫祭」をやるという、「村づくり推進室」主催のイベント。東京にいてはまずキャッチできない、ローカルな企画である。役場に申し込みの電話をした際、「お住まいは村内ですか？」と聞かれ、コロナの状況もアレなのでおそるおそる、東京都なんですけど大丈夫ですか？と様子を探ったら、すこし驚いていたけど「ありがとうございます」と普通に受け入れてくれた。のみならず、昼食は一人一品持ち寄りのポットラック形式なのですが、遠方からおこしなので大丈夫です、お箸とコップだけお持ちくださいと、気を利かせてくれた。

<はやおきした話>東京から生坂村までは高速道路で 3 時間半。集合時間は 8 時 40 分。集合場所は生坂村のバイパス沿いにある公衆トイレ。遅くとも 4 時半には家を出なければならない。出発前日の 8 月 5 日、それまでは 38 度とかあった最高気温が突然 27 度まで下がってしまい、体の調子がくるって一日中眠い状態が続いていた(これを書いている 8 日現在もまだ眠い)。それなのにいざ夜 11 時に寝ようとしてもなかなか寝付けず、半睡の状態で時間が過ぎていき、3 時半には寝るのを諦めた。それから携帯で漫画を読み始めてしまい、四時半にあわてて出発。1 時間半走ったところで一度 SA に入り、朝ごはんのおいなりさんを買う。再度出発するも急激に眠くなり、運転中に危険を感じたので 1 時間ほど走ったところでもう一度 PA に入り 10 分だけ仮眠。このときは綺麗に仮眠できた。

そして集合場所に着いたのは 8 時 50 分。ぎりぎりだった。結構な人数の参加者がいてびっくり。20 人以上いたのではないか。集合した場所からみんなでぞろぞろと 10 分ほど山を登り、雑木林のなかにぽっかりあいた空き地のようなスペースにテントが立っているところに出た。朽ちた車が三台ほど転がっていて、長野っぽいなあと思った。そこで遠野さんと初めて対面。

屋外だったけど、全然居られる。東京とは比べ物にならない涼しさ。日が昇ってからは日差しこそきつかったけど、木陰は気持ちよかった。

参加者は若い親子連れが多くて、みんな日焼けして健康そうだった。ゆるい服装に髭のお父さんが何人かいて、松本っぽいなあと思った。なんとなく、移住者が多いのかなと思った。若い移住者のコミュニティがあるのではないか。すくなくとも一人は埼玉出身の大工さんだった。

最初に村長の挨拶。みなさん朝早くからありがとうございます。話を聞いていると、今回のアースオーブン制作をきっかけに、このあたりを「いくさか創造の森」とする計画があるらしい。村長さんは遠野さんの紹介のあと、松本山雅 FC の人たちが三人も来てくれています、皆さんと一緒に参加しますと紹介。生坂村は松本山雅のサポーター？らしい。松本に住んでたときはあちこちでポスターを見かけたけど実物は初めて見た。

遠野さんによる版築の説明の前に、両川さんという建築家の方がロケットストーブの仕組みを解説する。用意しておいたレンガをその場で煙突状に組み立てて、付近から枝を集めてきて突っ込み、新聞紙から火をつけるとみるみる燃え上がる。ロケットストーブとは要するに煙突効果を利用して空気が勝手に供給される仕組みのストーブのことらしい。この煙突のことをヒートライザーと呼ぶ。「ヒートライザー」「ヒートライザーってなんですか？」「熱を上げるってことですかね」「ああ、ヒートをライズするのか」「ヒートライザー」「ヒートライザー」という言葉が何度も聞こえてきた。

その後で遠野さんによる説明。版築の基本的な考え方について。

土を使った建物っていうと、古い民家とか、お寺とか、古いものを想像すると思うんですけど、世界的には最先端のものになってきています。フランスでは、建設残土をつかった土の街をつくってしまおうという計画もありますし、何度でも使える 100%リサイクル可能な唯一の素材です。輸送コストもないので環境負荷も少ないです。

という話を、メガホンを片手に何冊もの大判の図録を開きながらしてくれた。

土は素晴らしい素材だけど、日本で普及しないのはやはり地震が多いからだろうとのこと。構造の計算がしにくいとか、そんな面倒なものなら他の素材を使ってしまいがちとか、多分いろいろある。

テントの下で、みんなで土を触ってみる時間。付近から持ってきた二種類の土（粘土が多い畑の土と、すこし砂も混ざっている土）と、佐久から持ってきた黄色い土（遠野さんがいつも版築に使っている土）が 1:1:1 の割合でフネに入っている。消石灰も少し。

作成者:村上 慧
2022 年 8 月 13 日

<遠野さんから得た、版築制作のポイント>

1:消石灰は基本的に 10%程度混ぜている。

2:粘土の割合が多いようなら砂も混ぜること。粘土が多すぎてもだめ。**版築に適した土は、焼き物には不向きである**。版築は直径 2 センチ程度の「石」から、細かい「粘土」まで、できるだけ粒の大きさのバリエーションがまんべんなくある土を使うことが望ましい。なので粘土が多すぎる土の場合は砂や砂利を混ぜたりするという。

3:大きさ 2-3cm の石が多少入っているほうが強度が増すというのも意外。海外では「岩石かよ」というサイズのものも入れたりしていると、いろいろな写真(→)を見せてもらう。さまざまな事例があるが、とにかく現地の土に合わせてつくるしかなさそう。本を見ていて元気が出た。要するに「固まればなんでもあり」なのである。

4:土を叩く時は一層の厚みを 5-10 センチ位にするのがいい(前橋工科大のリーフレットには 10-15 センチと書かれていたが、今では 5-10 が良いとの考えに変わったようだ)。ちなみに遠野さんが設計した長野市にある「OYAKI FARM」(後述)のエントランスの版築壁は一層 6-9 センチで、全部で 80 層以上ある。突き固めるのにかなりの期間を要したらしい。

・突き固めるときは、最初の厚みよりも 4 割沈むくらいまで叩く(10 センチなら、6 センチになるくらいまで叩く)。外側から内側に向かってまんべんなく突き固めること。その時にでる音もよく聞くこと。しばらく突いていると、だんだん金属音のような、硬い音に変わってくる。そうしたらもう大丈夫。

・最も驚いたのは、水の量の少なさである。僕が東京で試験的に作った版築レンガは、水が多過ぎたようだ。遠野さんが実演してくれた土(↑)は、想像よりも遥かに少ない水分量、ぐっと握って数秒間には形が崩れはじめるくらいの塩梅だった。叩いていて、水が浮くか浮かないかくらいがいいとのこと。

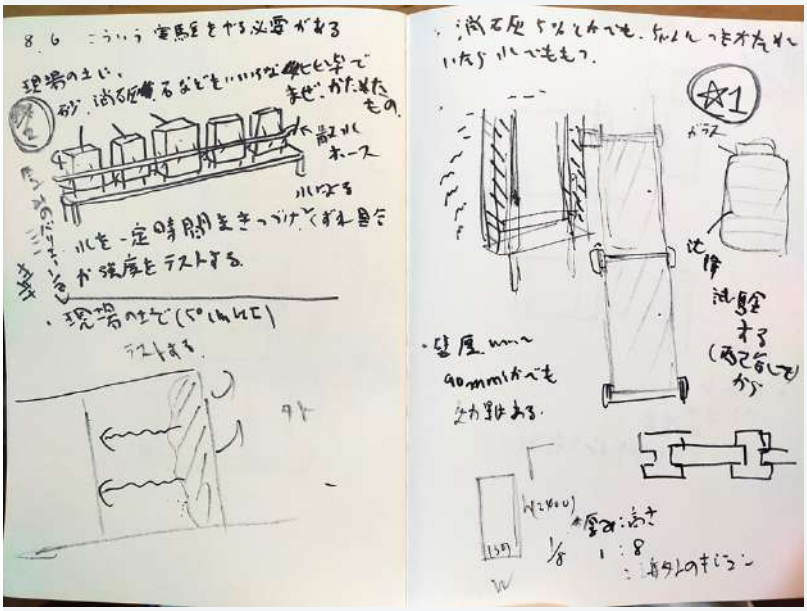
みんなで土を叩いたり混ぜたりする時間があったが、**子供たちが大活躍**だった。とんとんとんとん、と声を出しながら男の子も女の子も叩いている。親たちはその姿を写真に撮るのに夢中になるわけでもなく、一緒になってとんとんやっていた。

松本山雅 FC の人たちも加わっている。こうやって村の人達に溶け込む感じが、地元のサッカーチームっぽい。なんでも明日いわきで試合があるらしい。それに勝てば J3 首位になります、応援をお願いしますと言っていた(僕が松本に住んでたときは J2 だった気がする)。選手たちは版築を手伝ったり、子どもたちとスイカ割りをやって帰っていった。リーダー格の人が「今度ランニングしましょうね！もう覚えましたから」と、一人の若い男の人に向かって声をかけていた。言われた男性は「まじか～」と笑っていた。10 キロって言ったましたよねえ。すげえなあと、隣にいる人に漏らしていた。

11 時ごろにはワークショップは終了し、みんなでスイカや、きゅうりの一夜漬けや、持ち寄った料理を食べる時間。ぼくが一人で本をぱらぱらとめくっていたら、男性が話しかけてくれた。なにか版築で作るんですか？と。埼玉出身で、生坂村在住の大工さん。軽く説明をしたら興味を持ってくれた。メールアドレスを交換した。

ワークショップ解散後、スタッフと遠野さんについて行き、車で 10 分ほどの、古民家を改装したおしゃれなカフェに移動した。僕はハニーチーズトーストを食べながら、遠野さんたちの打ち合わせ終了を待つ。窓が開いているだけでクーラーをつけていないのに過ごせるくらいには涼しい。東京とは湿度が全然違う。暑さの原因の半分以上は湿度にあるのではないか。

3 時半ごろに打ち合わせが終わり、スタッフたちは帰って行った。それから遠野さんと二人でじっくり話せた。まず遠野さんの話っぷりから、土という素材への信頼がびしびし伝わってくるのを感じる。この国の建築に土を使っていくためには木造と組み合わせて使うのがいいが、そのために乗り越えなければいけない課題をたくさん聞けた。
僕も今回のプロジェクトでは、構造は木に任せようとしている(本報告書 P21)。屋根は木の柱で支え、その外側に版築の壁を作るのがいいはずなのだけど、その柱と版築壁をどのようにつなげるのがいいのか、いくつかアイデアをもらった。



遠野さんからは「構造的なアイデアはあとでたくさん出てくると思うから、まずは現場の土の組成を調べてみた方がいいかも」というアドバイス。
ガラス瓶に現場の土を入れて一晩待ってから観察する、簡単な沈澱実験をすることにした。その写真を遠野さんに送り、何が足りないか（砂や石を足すべきかなど）を見てもらうことに(←の右上☆1のとこ)。

また**「水」はそれほど恐れなくても大丈夫**ということがわかった。雨ざらしの版築なんて、世界中にある。最初にちゃんと突き固めれば、屋外でも長期間の利用に耐えられる。むしろ問題は壁の「厚み」ではないかと、遠野さんは言った。
今回のプロジェクトは要するに、夏は外側の壁を気化熱で冷やし、冬は室内の空気を暖めるという方法である。
そこで問題なのは、冷えた壁の厚みがどのくらいなら、その冷気が室内側にちゃんと伝わってくれるのかということである。そこで、何種類かの厚みの違う版築レンガのテストピースを作り、それぞれに表面温度計をつけて、水をかける実験をやったほうがいいということに（↑の左上、☆2 のとこ）。

終盤は建設業が抱える社会問題といった、すこし大きな話題にうつっていった。

版築が良いのは、材料がその場にあることだ。現場を掘り返した土で建築をつくることができる。
建設工事の際、基礎をうつため、あるいは地下を作るためには地面を掘る必要がある。当然ながら土がたくさんでる。去年、熱海で大変な土砂災害があったが、その原因として不法投棄を含む工事残土が挙げられている。
いままさに、僕のアトリエの前の建設現場でも残土が出ている。最初は 3m くらいの高さがあったそれを、毎日ダンプカーが少しずつ運びだしている。どこかの処分場で捨てられるのだろう。**なんかすげーバカみたいなことをやっている**なと思う。
発酵熱をつくるために落ち葉を集めているときにも似たようなことを思った。甲州街道には立派なケヤキ並木がずーっと続いているけど、秋になると道路は落ち葉でいっぱいになる。その大量の落ち葉を、業者の人たちが定期的に集めて袋詰めし、焼却処分場に運んでいる。
調べたところによると、令和 3 年 9 月時点で、調布市が集めた枝・葉・草の 98%は「焼却処理」されている（立川市、町田市、小金井市、武蔵野市、西東京市などは堆肥化の試みをしているらしい。えらい）。
落ち葉なんて放っておけばいいのにとも思うけど、地面をアスファルトで固めたばっかりに、落ち葉が「環境から浮いたもの」に見えてしまっていて、わざわざエネルギーを使って燃やすという作業をやっている。**マジでどうかしている**。
そんな違和感があり、その場にある土で空間を立ち上げることができる「版築」という方法を試そうと思った。それなら「納得がいく」から。蓄熱体としてもすぐれているし、かなりの可能性を感じている、という話を遠野さんにしたら、
「そのポテンシャルがあるのは、土しかないと思っている」
という答えが即、返ってきた。言葉の波動が飛んできた。
遠野さんはもう 20 年以上版築の可能性を追求しているが、自然現象をつかった冷暖房との組み合わせは経験がないと言った。だから
「それは僕がやります」
と言った。**これが言えて嬉しかった**。がんばってくださいとエールをもらい、5 時過ぎに遠野さんと別れた。

僕は汗だくになり、乾き、また汗だくになり、乾きを繰り返した T シャツのままで車を走らせ、松本へ向かった。本屋「栞日」に行くという目的がひとつ、風呂に入るという目的がひとつ。
松本は「松本ぼんぼん」という、巷では**「（広告代理店によって）作られたお祭り」**として有名なイベントの真っ最中だった。まず栞日に行き、僕の本『移住を生活する』をオーナーの菊地さんに献本する。菊地さん 5 年ぶりに会ったけど日焼けして真っ黒で髪がもじゃもじゃパーマで、一人だけ南米にいるひとみたいになっていて、一瞬誰だかわからなかった。なんというか、全身から自分のやっていることに対する自信がみなぎっており、元気をもらった。
二階の書店スペースに**『嬢と私』**がおいてあってびっくり。本当にびっくりした。STORY WRITER の西澤さんが**「売れなすぎて感想が聞こえてこないのでぜひ読んで、感想ください」**と献本してくれた、ブコウスキーとカフカを安酒で割ったドリンクを飲まされたような読後感の最高小説である。まさかこんなところで出会うとは。
向かいの菊の湯にも 5 年ぶりに入り、ここでようやく汗を流す。風呂上がり、久々の松本をふらふらする。前に住んでいたところは駐車場になっていて、隣のウエディングショップも綺麗なアパートに変わっていたりしたけど、「ポンヌフ」とか、いくつかの馴染みの店は普通に営業を続けていてほっとした。

スペイン料理屋「壺屋」の前を通りかかり、お腹が空いていたので入ろうとしたのだけど、怯んだ。友人がやっている店なのだ。5 年前に突然街を出て行った人間が入っていいものか、ちょっと勇気が必要だったけど、扉を開けるとオーナーの八杉ちゃんはびっくりもせずに、めっちゃ暖かく迎えてくれた。

最近の松本事情やら、八杉ちゃんがこつこつと続けている本づくりの話などを聞く。東京の文学フリマに「ルルラーラ！」という名義で年1回のペースで短歌集をだしているらしい。僕は文フリに行ったことがない。次は文フリで会いましょうと約束。イカ墨のパスタセットを食べる。
夜はアルプス公園駐車場という、**松本屈指の車中泊スペース**で眠る。同志が何人もいた。楽しそうに花火やってるカップルもいた。
「この色、マジきれいじゃね？」という声が響く。
翌朝 6 時半ごろに起き上がり、公衆トイレで顔を洗い、栞日で買った短歌集をぱらぱらやって 7 時半ごろにコメダ珈琲店安曇野豊科店へ行く。
「人員不足でいろいろ遅れてます。ごめんなさい」という主旨の張り紙が入り口に貼ってあった。混んではいないけど、お名前をお書きになってお待ちくださいと言われ、**「ムラカミ」の四文字が面倒くさくて「アベ」と書いてしまった**。が、その名が呼ばれることはなかった。モーニングセットのパンを食べて、探訪記を書くことを思い立ち、この文を書き始める。

9 時半ごろに長野市に向かう。遠野さんが設計した「OYAKI FARM by irohado」の見学へ。1 週間ほど前にオープンしたばかりで、しかも日曜日なので客でごった返しており、整理券制になっていた。

エントランスに高さ 5m ほどの版築の壁が立っている。

これは工事残土を使ったものらしい。先ほども書いたとおり、一層 6~9 センチの層を 80 層以上突き固めている。この版築の作業だけで二ヶ月くらいかかったと言っていた。
この版築壁は、中に木の柱が埋め込まれている。構造はその柱が担っているので、この壁は構造壁ではない。
壁にはヒビが走っていたが、中の柱と版築の「動き方」の違いが、表面にヒビとなって現れているらしい。
崩れた土が通行人に降りかかるのを防ぐため、表面にはウレタン系の塗料がけっこうべったりと塗られているので、風合いは純粋な「版築」ではないと遠野さんは言っていたが、この層の重なりには圧倒された。客さんもみんな、これ何？石？すごいね、と漏らしていた。
OYAKI FARM ではおやきの製造過程も見学できた。具材を包む作業は人力で、**1分間に 3~4 個包む**という。売店でかぼちゃと野沢菜のおやきを買って、車内で食べながら東京へ帰った。

<一泊二日長野版築探訪記>おわり

おわりに

第二回目の報告は以上である。なんだかものすごく長くなってしまった。実はこの報告書を書き始めたのは 8 月 1 日。二週間近くかかってしまった。最後まで読んでいただいたあなた、ほんとうにありがとうございました。次回は、現地の草刈りや土採集のもようなどを報告したい。毎日暑すぎてやる気が出ず、契約日以降まだ一度も現地に行けていないのだが。

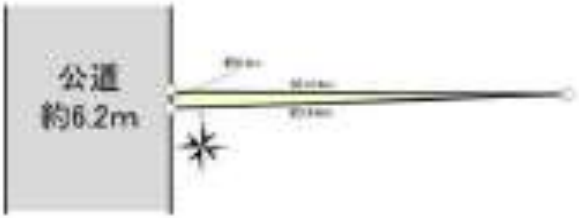
文責:村上慧

おまけ 1<土地を探すにあたってのアドバイス>

もし、これから土地を買ってそこで好き勝手やりたいという人がいるなら、「市街化調整区域」でも「防火地区」でもない場所をおすすめしたい。「市街化調整区域」とは、景観を守るために行政が指定している地域で、許可がなければいっさいの建築物(屋根と壁があるもの)をつくることができない(畑とかならいい)。
初めは最も有力な敷地候補だった厚木の土地がだめだったのは、そこが「市街化調整区域」だったからである。そして「防火地区(あるいは準防火地区)」でなければ、10 ㎡以下のものなら「建築確認申請」という許可をもらわなくても、建築物をたてることができる。
また村上は今回、近くにコンビニ、大きなスーパー、ホームセンターがある土地を買った。なぜコンビニが必要なのかというと、トイレが使えるからである。電気は 3~4 万円で「ソーラーパネル」「自動車用バッテリー」「チャージコントローラー」を買えば簡単な自家発電ができるが、トイレはすぐにどうにかなるものではない。いずれコンポストトイレをつくってみたいが、当面はコンビニのを使うしかない。
また大きなスーパーやホームセンターにはイートインコーナーやフードコートがあり、WIFI も使えることがある。これで朝、**洗面所で顔をあらって朝食(できればトーストとコーヒーのモーニングセット)などを食べながら「ふう」とやることができる**。パソコン作業もできる。もちろん喫茶店でもよい。

おまけ 2<前回紹介した、荻窪の変な物件について>

前回の報告書のなかで、荻窪にある 70 万円の極小物件を紹介した(↓「アットホーム」の ウェブサイトより)。



これに対し、数人の知人から、アメリカのアーティスト、ゴードン・マッタ・クラークの『フェイク・エステイト』という作品を思い出したという返信があった。やりとりをしているうち、この奇妙な形の土地を、何人かで分有したらどうかというアイデアが浮かんだ。
ここの固定資産税を 7000 円と仮定すると、例えば 100 人で買ったとして、購入には一人 7000 円。固定資産税は一人 70 円/年なので、最初に 100 人から 1 万円ずつ集めておけば、40 年くらいは追加でお金を集めなくても分有できる。
そしてこの一坪の土地を百等分したら、一人当たり約 180mm×180mm の土地を手に入れられるので、に**んじん一本くらいは育てられそう**。分有という行政手続きの煩雑さを含めて、楽しいプロジェクトにはなりそうだ。この物件は 8 月 13 日現在、まだ売りに出されている。なにかアイデアがあればぜひ募りたい。

おまけ 3

この報告書を新宿の喫茶店「タイムズ」で書いている最中に、見知らぬ青年から
「すいません、今泉監督ですか？」
と声をかけられるという珍事があった。初めて言われたが、たしかに似ていると言われれば似ているかもしれない。つい笑って「違います」と答えたら、「あ、違いました…」と苦笑いで去っていった。「猫は逃げた」僕も観ましたよ、と話を広げてもよかったなあ…。